哲學研究　第百十五號　第十卷　第十冊

フィーアカントの社會學概念に於ける二三の問題（二）

五十嵐　信

三（承前）

a　社會學を一の特殊科學或ひは個別科學として樹立することに就いて。

ジンメルが、各科學は統一的なるものとしては何れの科學によつても把捉せられ得ない何らかの事物をばその全體の一方面に就いて一の概念の見地から考察するものであるが故に一の抽象に基いて居る、從つて、社會學も單に人間は社會的存在物として理解せられなければならぬと云ふこと及び社會は凡ての歴史的事象の運載者であると云ふことに基く學問上の一方法・思考上の一方式――歸納法の如き――たるのみに止らずして一の獨立の科學となるためにはさうでなければならぬ、と說

いて居るのは、云ひ過ぎて居る、否、或る意味に於いては、云ひ足りないところがある。如何なる科學も、その對象をばその具體的全體に於いては把捉し得ず、各科學は、夫々、自らにとつてアプリオリなる一定の範疇に從つてその對象を把捉するものなるが故に、凡ての科學が抽象に基いてのみ成立し得るは、云ふまでもないが、その抽象には、幾多の段階があり(コント以來社會學者の學問論に於いて重視せられて居るところの抽象的科學と具體的科學との區別も、實は、抽象の程度を異にする科學の區別に外ならない)、複雜なる事物を對象とする科學は適當に結合せられる幾多の見地から考察することによつてのみ充分にその對象を把捉し得るのである。尤も、かかる場合には、それらの諸見地の中の何れが中心的地位を占めるか、が、研究者に於いて明白に意識せられて居なければならぬ。然らざれば、かくして獲られた知識は、一の特殊科學或ひは個別科學を成さずして一種の百科全書を成すであらう。而して、普通に、その科學の純正的部門或ひは抽象的部門と稱せられて居るのは、かかる中心的見地からの把捉なのである。米田博士が夙に力說せられて居る如くに、社會的實在を對象とする科學に於いても、その本質を成すと認められる方面を抽象して把捉しこれを一の體系に組織しようとする純正社會學が建設せられると共に、その外に、純正社會

學の知識を中心としつつ全體としての社會の各方面に關する知識を一の體系に組織しようとする綜合社會學が建設せられることは、我々の知性の止みがたき欲求である。而して、この限りに於いて、綜合に對する要求は、フィーアカントに於ける如くに輕視せらるべきではない。否、フィーアカントがその社會學の中に體系的部門と歴史的部門とを區別して居るのは、或る意味に於いて、私たちの純正社會學と綜合社會學との區別に相當するものと思はれるのである。而も、ジンメル並びに彼に倣つて社會學をば一の特殊科學或ひは個別科學として樹立しようとするフィーアカントらに於いては、右に述べたことが明白に意識せられて居ない結果として、彼らの所謂特殊科學或ひは個別科學としての社會學は、私たちの純正社會學のここかしこに私たちの綜合社會學の諸斷片が混合せられたものとなる恐れを有するのである。

このことに關聯して、私たちにとつては、なほ、別な問題が殘されて居る。ジンメルが社會學をば特殊科學としフィーアカントが社會學をば個別科學とする場合に於けるその特殊科學或ひは個別科學は、彼らの所述によつて見れば、單に、一箇獨立の科學と云ふことを意味するに止るやうに思はれる。然るに、社會學界に於いては、よく知られて居る如くに、他の諸社會科學の總稱或ひはその百科全書としてではなく一

箇獨立の科學として樹立せらるべき社會學が他の諸社會科學に對して如何なる地位を占めるか、卽ち、社會學は他の諸社會科學の研究の基礎となる或ひはそれらの成果を統一する科學であるか又は他の諸社會科學と並んで社會的實在の一方面或ひは社會的現象の一種を對象とする高田博士の所謂平民的科學であるか、が、重要な問題となつて居る。[1] これは、例へば、フィーアカントが漫然と百科全書的方針の中に數へて居るギディングスの如きが、夙に明白に問題として論究して居るところである。而して、ギディングスによれば、社會學は一般的社會科學(general social science)であるが、併し、一般的科學は必ずしも諸科學の寄せ集めではない、單一の部類に屬し從つて正當に單一の科學の主題たるべき諸現象がその數多く錯綜して居るために如何なる研究者も單獨でそれらの凡てを熟知することを望み得ない場合にはそれらは多の特殊的科學の間に分配せられる、而も、それらの諸現象をば全體に於いて一の部類として取扱ふ一般的科學が一の條件に基いて存立し得る、卽ち、一般的科學はその亞部類の凡てに共通的(common)なるその部類の屬性を取扱ふべきであつて何れかの亞部類の特殊的なる屬性を取扱つてはならない、而して、かかる共通的屬性は元素的(elementary)である、一般的原理は基本的(fundamental)である、故に、一般的科學は元素及び第

一原理の科學である、と云ふのである。[2] 而して、ジンメルも、上述の如く、社會學が他の諸社會科學に對して諸社會科學が相互に對して成すとは異つた關係を成すことを指示して居り、その關係は認識論が諸認識に對して成す關係及び幾何學が物理學的化學的諸科學に對して成す關係に類する、と云ふのであるから、彼は社會學をば普遍的社會學とは考へないが一般的基本的社會科學と見て居るものである、と强ひて解せられ得ないこともない。[3] 何れにせよ、フィーアカントによつては殆ど無視せられて居るが、ここに、一の問題が存在する。この問題は、一見すれば、何れに決定せられようとも他に影響するところ少いもののやうにも思はれるが、實際に於いては、社會學を一般的社會科學と見做す見解が綜合社會學を重視するに至るに反し、[4] 社會學を平民的社會科學と見做す見解は、綜合社會學を輕視するに至り而もこれを全然無視し得ずして純正社會學の中に綜合社會學を混合するに至る傾向を有し易いのである。

1　フィーアカントのこの問題に對する態度は、僅かに、次の一句によつて窺知せられ得るに止る。『フランツ・オッペンハイマーにとつては、社會學は、一方に於いては經濟學に對し他方に於いては歴史學に對する綜合的上位科學である。彼は、この關係たぶ、類似の方式に於いて個々の有機的諸自然科學の上に位する一般的生物學を指示することによつて説明する。併し、自然科學と精神科學との間には原理的相異が存在するが故に、かかる類比は、我々に敎へるところあまり多くない。オッペンハイマーの直接の論述も、この上位科學が如何ほどまでその取扱ふべき獨立の問題を持つて居るか、これが如何ほどまで兩領域の最も重要なる結

果た單純に總括するものであるか、を、適當に認識せしめない。百科全書に向ふ或る傾向が、バルトに於けると同樣にここにも認められ、一般にその全方針を特質づけて居る。」(S.3.)――なほ、フイーアカントのこの批評が不當なることは、Oppenheimer, System der Soziologie, I. Band, Allgemeine Soziologie, I. Halbband, Grundlegung, 1922, S.111—146. の論述によつて明白である。

2　Giddings, op. cit., p. 31.

3　ジンメルは、Grundfragen der Soziologie, 1917. に於いては、Allgemeine Soziologie と Reine oder Formale Soziologie と Philosophische Soziologie とを區別して居るが、大體に於いて、第一のものは私たちの綜合社會學に當り、第二のものは私たちの純正社會學に當る、と云はれ得よう。

4　米田博士は、純正社會學及び綜合社會學の外に、諸社會科學の方法論たる組織社會學を立て、一般的社會科學としての社會學をば　の三部門を以つて組織して居られる。

私たちも、社會學をばギディングスの意味に於いて一般的社會科學であると考へる。併し、單に經濟・政治・法律・道德・宗敎等凡ての社會的現象に一般的共通的なる事物を對象とすると云ふ理由を以つて、社會學が社會的現象の基本的元素的事實を對象する從つて諸社會科學の基礎を成すと見る、ギディングスの見解は、云ふまでもなく、不充分であらう。社會的現象に共通的なる事實を對象とするが故にではなく非社會的現象から異る特殊の現象としての社會的現象の本質を成す事實をば對象とするが故に、社會學は、一般的基本的社會科學なのである。かくて、此社會的現象の本質をば如何なる事實に認めるかによつて、種々なる一般的基本的社會科學卽ち社會學

が成立し得る、否、成立しなければならないのである。今、私たちは、この問題に深入りする餘裕を持たないが、社會學の對象を定めるために非社會的現象と社會的現象との差異を求めるに當つては、少くとも、二つの重要なる立場があり得る。それは、社會的現象をば自然的現象の範圍内に置いて從つて自然的現象の一種と見て社會的現象と他の自然的現象並びに文化的現象との差異を求める立場と、社會的現象をば自然的現象の範圍外に置いて從つて文化的現象の一種と見て(或ひは、文化的現象と同視して)社會的現象と他の文化的現象並びに自然的現象との(或ひは、單に自然的現象との)差異を求める立場とである。蓋し、人間の社會は、自然的現象の一種でありながら、而も、凡ての文化は、社會に於いてのみ實現せられるからである。社會的現象の本質を模倣或ひは威壓或ひは心意的相互作用に求めるのは、第一の立場に立つものであるが、今や、ドイツの諸學者の社會學界への公然たる參加と共に、文化科學としての社會學が次第に樹立せられようとしつつあり、歴史哲學として出發した社會學は、一たび、自然科學たらうとして居たが、今や、文化科學とならうとして居るのである。[1] フィーアカントの社會學も、要するに、かかる傾向を示す一例であることは、後に述べる社會の本質に關する彼の所説によつて察知せられるであらう。[2] 併し、私たちは、社會

的現象の本質の把捉に關して右に擧げた立場が共に正當なること及びこれらの立場に立つて種々なる社會學の成立し得る否成立しなければならぬことを確信し、一の社會學體系の中に種々なる立場に立つ社會學を混合しようとする無意識的努力が今日まで社會學の發達を妨げて居た最大の原因であることを意識するものである。

1　併し、文化科學としての社會學が如何なるものとなるかは、未だ豫測を許さない狀態にある。諸文化科學の百科全書でもなく文化哲學でもない一般的基本的文化科學としての社會學を求めようとする場合に、私たちに多少の暗示を與へるのは、ただ Max Weber の Verstehende Soziologie の概念のみであらう。(Grundriss der Sozialökonomik, III. Abteilung, Wirtschaft und Gesellschaft, 1921, Kapitel I, Soziologische Grundbegriffe.)。

2　尤も、フイーアカントは、一方に於いて、甚だ正當に、方法としての社會學から個別科學としての社會學を區別し、その社會學に於いて體系的部門と歷史的部門とを區別し、かかる社會學をば應用社會學から區別して居るが、他方に於いて、重大なる混同を犯して居る。即ち、彼は、Gesellschaftslehre の副題に、Hauptprobleme der philosophischen Soziologie と記して居るが、彼の社會學が如何なる意味に於いて哲學的なるかに就いては、一言をも費して居ない。併し、それは、恐らく、現象學的方法を用ゐる社會學を意味するのであらう。けれども、歷史哲學的ではなくて個別科學的な而も哲學的な彼の社會學は、所謂社會哲學からは如何に區別せられるのであらうか。實際に於いて、彼の社會學は、唯に自然科學としての社會學と文化科學としての社會學とを混合して居るところあるのみならず、科學としての社會學と哲學としての社會學とをも混合して居るところがある。――フオン・ウイーゼは、この點に關して次のやうに批評して居る。『フイーアカントは、彼の社會學が「哲學的」と認定せられることに大なる價値を置き、この名譽慾が彼を如何なる危險に導くかに氣づかずに居る。現象學と云ふ人工の高く懸つた太陽が、彼を眩惑し終つて居るのである。彼は、序文の中に、ジンメルが社會的生活の最後の形式・力・事實を確かめようとする彼の目的をば「當時の

研究狀態の結果として」解決し得なかつたことを主張して居る。「それは、現象學の發達によつて初めて解決せられるものとなつた」と云ふのである。併し、ジンメルは、第十八世紀に生きて居たのではなく、本書の著者よりも僅か九歲年長であつたに過ぎない。彼は、その生前に既に各種の現象學を知つて居た。なほ、この哲學上の學派は、フィーアカントの社會學上の研究をば殆ど助け得て居ない。本質觀照は、また、以前から知られて居るものである。今日では、それは、困難なる關聯をば明瞭にするためにより一層曖昧にするために使用せられて居る。社會學者は、嫉み羨むことなく、それを哲學者に委すべきである。』

(Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie, 3. Jahrg, Heft 3/2, S. 178f.)

b　社會學の對象を社會化の形式とすることに就いて。

私たちは、ジンメルが上述の如くに社會的歷史的實在或ひは社會化に就いて形式と內容とを區別したことをば彼の創見と認めるものであり、且つ、ドイツの社會學者がこの彼の見解を重視しようとする心もちに同情し得ないものではないが、併し、ジンメルが社會化の形式と稱するものは、實質的に吟味すれば、一般の社會學者が社會的現象の元素的事實として或ひは社會形成若しくは社會進化の原理として或ひはその他の關係に於いて研究に努力しつつあるものに外ならず、彼は、この形式と內容との區別によつて實質的には何ものをも社會學に貢獻して居ないのである。フィーアカントがジンメルの用語を踏襲して自らの社會學を die formale Soziologie と稱し

ながら何が故にそれが形式的なるかに就いては説明を缺いて居り、且つ、實際に於いて私たちが彼の社會學の如何なる點が形式的なるかを見出すのに困難を感ずる所以も、[1]ジンメルのこの社會化に於ける形式と內容との區別並びにその形式を對象とするものとしての形式的社會學の概念が一見甚だ斬新の如くにして而もその意味するところ甚だ曖昧なる點に胚胎するのではなからうか。

1　ジンメルが社會化に就いて形式と內容とを區別する趣旨は、上に紹介して置いた通りである。而して、彼は、この區別を説明する場合に、この屢々用ゐられる名稱の他の意義によつて偏見をつくることないやうに、これはこの場合に於いては區別せらるべき要素の對立を近似的に名けるための一の比喩に過ぎないことを留意するやうにと、警告して居る。他方に於いて、現象學の立場から社會を研究しようとする人々は（これは、現象學者が社會に限らず凡てのものを研究する場合に取る手續きであらうが）、先驗的認識を取扱ふ部門を formale Soziologie と稱し經驗的認識を取扱ふ部門を materiale Soziologie と稱するやうである（Kracauer, op. cit., S. 133ff. なほ、Walther, Ein Beitrag zur Ontologie der sozialen Gemeinschaften, 1923, S, 5. 參照）。而して、フイーアカントの形式社會學は、ジンメルの形式的社會學と現象學者の形式的社會學とを實質上の連絡よりは寧ろ名稱上の一致に捕へられて（尤も、社會學を幾何學に比較するジンメルの思想は、このことに導く強い誘因を含むが）混合しようとしたものの如き觀が無いでもない。

何れにせよ、ジンメルは、所謂社會化の形式がその內容から區別せられて體系的包括的に研究せられ得ることを以つて、社會學が一の特殊科學として存立し得る根本的條件であると主張しながら、實際に於いては、毫も所謂社會化の形式をば體系的包

括的に研究して居らず單にその若干を例示して居るに止る。[1] 更に、彼が例示して居る所謂社會化の形式には、明かに、見方によつてはその內容とも見られ得るものを包含して居るのである。[2] 恐らく、彼が解するやうな意味に於いての社會化の形式の研究は、その對象とする諸形式をば個々別々に取扱ひ得るのみであつて體系的包括的には取扱ひ得ず、かくて、到底、一の特殊科學たり得ないであらう。彼は、マイノングに於ける意識の作用と意識の對象との區別の如きものを認め、心理學は心理的過程が身體との結合によつて如何に規定せられるかを研究する生理的心理學に於いても心理的過程が他の個人の心意との結合によつて如何に規定せられるかを研究する社會的心理學に於いても共に意識の作用を研究するものなるに反して、社會學は心意の作用から獨立して存立する觀念的實在の一種として社會化の形式をその社會化の內容から切り離して研究するものと考へて居る。併し、社會化の形式は、幾何學に於ける形式の如くに先驗的に設定せられ構成せられる形式ではなく、一定の條件の下に於いて個人と個人との本質的には心意的なる相互作用が實現する形式であるが故に、この個人と個人との心意的相互作用がその下に於いて行はれるところの諸條件を研究せずしては、その眞の意義は、理解せられ得ないのである。[3] ジンメルは、

社會化の形式の科學としての社會學をば幾何學に比較する際に、この比較が單なる比喩に止ることを注意して居るけれども、彼は、實際に於いては、この比喩に囚はれ過ぎ彼の社會學をば幾何學に準じて樹立しようとして居る嫌ひがある。而も、ジンメル自らも、實際に社會化の諸形式を研究するに當つては、それらの種々なる內容に結びつけて論究せざるを得なかつたのである。而して、フィーアカントの形式的社會學が如何なる程度までジンメルのそれを忠實に繼承しようとするものであるか、は、甚しく疑問に屬するが、彼がジンメルの社會學概念の中に盛ら・として居るトエンニースのゲマインシャフト及びゲゼルシャフトの論は、それぞれの內容と見做さるべき Wesenwille 及び Kürwille の論から切り離され得ず、彼自らの社會論も、それぞれの社會の內容或ひは基礎たる諸本能及び諸性向の論の上に立つて居り、又、各社會に於いて存立する意志方向、關心方向等の論を一の主要なる部門として居るのである。

1　ジンメルが社會化の形式として擧げて居るものを Soziologie の第一章によつて紹介すれば次の如くである。Über- und Unterordnung; Konkurrenz; Nachahmung; Arbeitsteilung; Parteibildung; Vertretung; Gleichzeitigkeit des Zusammenschlusses nach innen und des Abschlusses nach aussen. (2. Aufl., S.7.)——Hierarchie; Korporation; Konkurrenz; Eheform; Freundschaft; gesellige Sitte; Ein- und Vierherrschaft. (S.8.)——Konkurrenz; Parteibildung; Nachahmung; Bildung von Klassen, Kreisen, sekundären Abteilungen; Verkörperung der sozialen Wechselwirkungen in Sondergebilden sachlicher, persönlicher, ideeler Art; Aufwachsen und

Rolle der Hierarchie; „Vertretung" von Gesamtheiten durch Einzelne.(S.11.)——なほ、Soziologie に於いて研究せられて居る問題は、次の九である。Die quantitative Bestimmtheit der Gruppe; Über-und Unterordnung; Der Streit; Das Geheimnis und die geheime Gesellschaft; Die Kreuzung sozialer Kreise; Der Arme; Die Selbsterhaltung der sozialen Gruppe; Der Raum und die räumlichen Ordnungen der Gesellschaft; Die Erweiterung der Gruppe und die Ausbildung der Individualität.

2 クラカウアーは、ジンメルが社會化の形式と內容とを區別して居ることに對して、次のやうに批評して居る。『この思想家——彼が社會學のために大なる功績を擧げて居ることは爭ふべくもない——は、社會學的諸概念の位置を規定する目的を以つて、社會的現象の內容と形式とを區別し、而して、體驗せられた實在から構成せられた諸普遍化及びそれから分離せられた諸要素——それらの選擇は社會學的嚮導理念に基いて行はれて居る——をば形式と稱す。……この形式は、それが實現せられる凡ての場合に於いて、社會化せる人間の動作が普遍的と特質づけられる規律性の一系列を示現することによつて、社會學的概念となるのである。併し、この用語法は、二重の意味に於いて不充分であり、ジンメルは本來彼の社會學的研究の認識論的基礎づけをば當面の目的として居なかつたと云ふことを容認するにしても、なほ、さうである。先づ、「形式」と云ふ言葉は、實に、社會的生活の諸範域に於いて、精密に限定せられる意義を有するのに(慣習・儀式・業務規則・社會的習慣等は、凡て、頗る明晰な意味に於いて社會的形式である)、その意義は、ジンメルが社會學の中に導き入れた用法によつて蔽はれる恐れがある。併し、更に、これは一層本質的なことであるが、ジンメレは、彼が擧げた形式の多くが互ひに如何に關係するか、それらが如何に整序せられるか、それらによつて包括せられる社會學的羅續體(das soziologische Kontinuum)の諸性質の客觀的觀察が可能であるか否か、等を、全く曖昧なるままにして居る。彼が社會學的研究の出發點として使用して居る諸形式範疇を詳しく吟味すれば、それらの一部分は、多く中間の普遍段階にある具體的諸存在を表現するものであり(例へば、„der Arme", „der Fremde")、他の部分は、かかる存在の何らかの所與方式がそれに於いて獨立を獲得するところの抽象的諸要素を分離したものである(例へば、„Kreuzung sozialer Kreise")ことが、認識せられる。ジンメルは、彼が抽離した形式の多くがそれ自身また一層普遍的な諸形式の內容に(精密に云へば一層高い普遍化の特殊に)なつてしまふことがあることを意識しもせず、又、彼の諸形式をかやうに諸存

在の位階に配列する可能性がそれに關する直觀の客觀性に對して有する諸結果を悟りもしなかつた。彼は……屢々、中間の層から直ちに體驗實在（Erlebniswirklichkeit）に迫り、而も、殆ど、それから最高の社會學的諸範疇には昇らないが故に、彼の研究には、公理的基礎づけが缺けて居る。寧ろ、それは　主として、既に主觀的に規定せられた記述的心理學の認識であり、屢々、それは、その對象への甚しき近接から獲られることによつて、顯著なる一特質を取つて居る。ジンメルに於いても、一の新しい（實質的）認識論への頗る成果多い萌芽が屢々見出されるが（私は、例へば、彼が繰返して行つて居る "Distanz" の問題に關する吟味を、これに數へる）、彼は、彼の社會學的研究の重心を成す問題をば、本來悟つて居なかつたのである。』（Kraeauer, op. cit., S. 108ff.）――なほ、このことに關して想起せられるのは、オッペンハイマーによつて引用せられて居るネルソンの次の言葉である。『「形式的」と云ふ語は、相對的意義を有するものであり、その相對的意義に從つて、一の原理は、多かれ少かれ形式的たり得る。即ち、一の原理は、それがその對象をば完全に規定することなく或る點に於いて規定せずに置く限り、形式的なのである。』（Nelson, Kritik der praktischen Vernunft, S. 117. Oppenheimer, op. cit., S. 120.）

3　このことに關して、オッペンハイマーは、次のやうな比喩を述べて居る。『リンネの人工的な植物學體系に於いて、花蕊の數と云ふ誤つて選ばれた特徴が、近緣の植物をば異種とし全く無緣の植物をば同種として分類するに至つたやうに、ジンメルの人工的な體系も、社會學の取扱ふ事物の自然的な秩序を與へ得ない。』（Oppenheimer, ibid., S. 113f.）

併し、私たちは、先に、社會學をば社會的現象の本質を究明する一般的基本的社會科學であるとしたが、今、社會的現象を自然的現象の一種として見る立場に立つてその本質を求めようとするに當つては、ジンメルの見解が深い意義を有するものであることを見出さざるを得ない。一言にして言ふならば、經濟的・政治的・法律的・道德的・宗教的等の社會的現象が自然的現象の一種と見做される場合に、それらが等しく自然

的現象に屬する物理的・化學的・生理的・心理的等の諸現象から區別せられて社會的現象として認識せられる所以は、それらが何れもジンメルの所謂社會化卽ち心意的相互作用である點に存するのである。（文化的現象としての社會的現象の本質に就いては、暫く措く。）かくて、自然科學としての社會學の中心的部門たる純正社會學は、この心意的相互作用そのものを對象とすることになる。蓋し、純正社會學は、諸種の社會的現象をばそれぞれの種類の社會的現象として取扱ふものではなく、諸種の社會的現象が社會的現象たる所以の本質的事實を取扱ふものなるが故にである。この意味に於いて、純正社會學は、社會的現象の形式を對象とする科學であるとも云はれ得るであらう。併し、かかる純正社會學がジンメルの意味に於ける社會化卽ち心意的相互作用の形式（その內容から引き離されたところの）のみの研究に制限せられ得ないことは、上述の如くである。[1] 私たちは、純正社會學をばジンメルの意味に於いて形式的社會學と呼ぶことには承服し得ない。而して、フィーアカントが歷史哲學的百科全書的方針に對置して居るところの個別的形式的方針なるものは、その意味するところ極めて曖昧であつて、彼の形式的社會學は、或ひは、ジンメルの形式的社會學が正當に發展せられたものとして敍述せられ、或ひは、現象學者の形式的社會學と關

係するものの如く說明せられ、或ひは、單に私たちが純正社會學を上述の如くに形式的なる科學であると考へる意味に於いて形式的社會學と呼ばれるに過ぎないものの如くにも理解せられるのである。何れにせよ、私たちは、この多義的な形式的社會學と云ふ名稱をば敬遠しようとするものである。

1　米田博士によれば、ジンメンの所謂社會化の形式の研究は、心と心との相互作用を研究する社會心理學に屬する。社會心理學は、心と心との相互作用によつて各個人心に於いて生ずる特定の結果を研究する部門と心と心との相互作用によつて心と心との間に成立する諸形式及びそれら諸形式の諸作用を研究する部門とに分れ、その後の部門に於いて、社會學の中心部門たる純正社會學を形づくるのである（この點に就いて起り得べき種々なる誤解に就いては、米田博士、ビオ・ソシアル假說の意義、經濟論叢、第二一卷第一號を參照せられよ）。かくて、米田博士は、第一に、心と心との相互作用或ひは相互關係は如何なる形式に於いて成立するかを考へてその成立の一般的形式を決定し、第二に、心と心との相互作用或ひは相互關係がよつて以つて生ずる原動力は何かを考へてその原動力として諸般の Interessen を研究し、この點に於いて先づ一般的に社會生活の內容に觸れ、第三に、心と心との相互作用は如何なる社會心理的作用によつて行はれるかを考へてジンメルが漠然社會化の形式と稱するものの中でかの模倣の如きはかかる社會的心理作用の一であると見做して研究し、第四に、一定の社會心理作用によつて心と心との相互作用或ひは相互關係が如何なる形式を取つて次第に發展するかを考へてそれを根本的には親和形式と反對形式とに區別し更にこれら兩者を幾多の形式に分析し更にこれらの結合から成る複合的諸形式を擧げて研究し、第五に、これら諸形式に就いて一般的に個人意識と社會意識との關係を分析研究して、その純正社會學を大成しようとして居られる。

c　社會の分析的研究を重視することに就いて。

先に紹介して置いたやうに、ジンメルが、從來の社會學は相互作用する Kräfte がその直接の運載者から少くとも觀念的統一體に結晶せられて居るやうな社會的現象のみを問題とするに止つて居たのに反對して、客觀的構成物・抽象的存在にまで高まらない卽ち社會の原子の間に行はれ心理學的顯微鏡によつてのみ認められる相互作用の研究が社會學に於いて重視せられなければならぬことを主張して居るのは、卓見である。私たちは、勿論、社會をば有機體との類比に於いて理解しようとした所謂生物學的社會學とは何らの關係をも持續しようとする者ではないが、形態學的乃至分類學的から生理學的に推移することによつて獲られた輓近の生物學に於ける顯著なる進步は、社會學に對しても多大の暗示を與へて居るものと思ふ。而して、その暗示の一は、ジンメルが指摘して居るやうに、古い醫學が心臟や肝臟や肺や胃等限界が確實に定められる大なる器官のみに局限せられて居てそれなくしてはかの判明な器官が決して生ける身體を生じ得ないところの普通には擧げられない或ひは知られない組織を無視して居たと同樣な事情が、從來の社會學を支配して居り、社會と云ふ語の意味は、主として、或る程度まで歷史を有し體制を具へた國家や民族や種族や協會や會社の如きもののみに制限せられ、社會學は、これらの社會を全體として全體

に於いてのみ理解しようとして居た、と云ふことである。併し、これらは、個人と個人との間に行はれる一時的な又は持續的な意識的な又は無意識的なそのまま過ぎ去る又は多くの結果を生む無數の相互作用がそれらの個人を結びつけて居ることによつて生起し存續するものに外ならず、これらの相互作用を無視しては、いかなる社會も理解せられ得ない。かくて、フォン・ウィーゼが社會學の對象をば個人と個人との間に行はれる Beziehung とこれによつて生起し存續する Beziehungsgebilde とに分ち先づ前者を研究し次いで後者を理解しようとする態度は、[1] ここに擧げたジンメルの思想を適當に發展して居るものと云はるべきである。

1 Leopold von Wiese, Allgemeine Soziologie als Lehre von den Beziehungen und Beziehungsgebilden der Menschen, Teil I, Beziehungslehre, 1924. 私は、この書に關する小論を他の機會に於いて發表したいと希つて居るから、ここでは、素通りして置きたい。この書が公刊せられるに至るまでの著者の思想の發達に就いては、米田博士の詳細なる研究がある(フォン・ウイゼの社會學論、經濟論叢、第一八卷第五號—第一九卷第一號)。

然るに、フィーアカントは、私たちが後に要約するところの彼の社會概念の結果として、この社會の分析的研究と云ふことをばジンメル及びフォン・ウィーゼとは別に解釋して居るやうに思はれる。即ち、彼は、トエンニースに影響せられて、社會をば溫い從つて內的結合の緊密なるゲマインシャフトと冷い從つて內的結合の弛緩せる

ゲゼルシャフトとに分ち、更に、シュタウディンガーに指示せられて、人間相互の關係をば註に示すやうに分類し、[1] 進んで、それぞれの關係に於いて成立するところの意志方向・關心方向その他を論究し、以つて、社會の分析的研究を適當に發展せしめたと自負して居る。併し、フィーアカントは、人間相互の結合關係のみを注視して分離關係或ひは反對關係を全く無視して居るのみならず、ジンメルが多くの例を擧げて力說して居る所謂 mikroskopisch-molekular な過程の研究の重要をば忘却して居る觀がある。フィーアカントは、ジンメルの形式的社會學と現象學派の形式的社會學とを結びつけようとする結果、その所謂分析的研究は、從來の社會學が具體的社會をそのままその全體に於いて全體として理解しようとして歷史哲學的百科全書的になつたのに對して、社會生活に於ける究極的事實卽ち社會の本質を所謂本質觀照の方法によつて把捉しようとするものとなつて居るのである。而も、彼が把捉しようとする社會の本質は、最初から、個々の社會の大小・持續・內容に係りなく恒常的要素として存在するものとせられ居り、かくて、この際に彼が對象として居る社會は、その個々の論述によつても察知せられる如くに、主として『相互作用する Kräfte がその直接の運載者から少くとも觀念的統一體に結晶せられて居る』もののみに制限せられて居る

のである。その結果として、彼は、社會が個人の去來に係りなく存續することを說き、又、社會的關係をば種々に分類しながらゲマインシャフト關係が凡ゆる社會的關係に於いてその背景に存立することを說くに至つて居るのであるが、ここには、社會の分析的研究の概念がジンメルに於いてと彼に於いてとで甚しく相異することを指摘するに止めて、詳しくは、後に彼の社會概念殊に所謂全體思想の項を考察する場合に讓る。

1

Gesellschaftsverhältnis
- Gemeinschaft
- „Gesellschaft"
  - Anerkennungsverhältnis (Rechts- oder Vertragsverhältnis)
  - Machtverhältnis im weiteren Sinne
    - Kampfverhältnis
    - Machtverhältnis (genauer Übermachtverhältnis)(Benachteiligungsverhältnis)

Sachverhältnis (aussergesellschaftliches Verhältnis)

d　社會學の研究に現象學的方法を適用することに就いて。

社會學をば社會哲學から區別し、これを經濟・政治・法律・道德・宗教等諸般の社會的現象がよつて以つて社會的現象となるところの事實を對象とする一般的社會科學と見做し、且つ、かかる社會的現象の本質的事實を求めるに當つては社會的現象をば自

然的現象と見る立場も社會的現象をば文化的現象と見る立場も共に存立し得る否存立しなければならぬと確信する、私たちが、社會學殊に純正社會學の研究に現象學の方法を適用しようとするフィーアカントの思想に對して如何なる態度を取るか、は、容易に推察せられ得ることと思ふが故に、ここには簡單に論結して置きたい。

輓近の社會學が、社會をば有機體との類比によつて說明することから社會をば成員たる諸個人の心理的作用を通じて解釋することに推移することによつて、一段の進歩を遂げたことは、よく知られて居る事實である。ギディングスは、社會は、アリストテレスの『政治學』に始りボーダンやモンテスキューを經て發達した社會の客觀的解釋に於ける如くに人種や土地や氣候や遺傳や歷史的事情を以つて解釋せられることも可能であれば、グロティウスやホッブスやロックやヒュームやベンタムやバークレーやカントやヘーゲルを通じて發達した社會の主觀的解釋に於ける如くに人性や效用や倫理的命令や理想を以つて解釋せられることも可能であるが、社會的現象を科學的に說明する社會學に於いてこれら兩解釋が統一せられなければならないことを力說し、且つ、客觀的解釋は自然進化の公式に於いて最低の言葉に還元せられてから體系的に遂行せられて居るに反して、主觀的解釋は社會的現象の全範圍

を通じて同樣には徹底せられて居ないと考へ、知られて居る如くに、同類意識に於いて社會的現象の主觀的解釋の最後の要素を發見したと考へたのであつた。併し、先に擧げたジンメルの『如何なる外部的事象をば我々が社會的と稱するにしても、若しも、我々が心理的動機たる感情や思想や欲望をば唯にその外部的事實の運載者としてのみならず更にその本質的なるもの本來我々にとり唯一の關心的なるものとして全く自明的に認識するのでなければ、それは、雲が渦卷くことや樹枝が交錯して成長すること以上には了解せられず意義を持たない人形芝居であらう』と云ふ語は、現代の殆ど凡ての社會學者の共通的態度を道破したものである。かくて、社會的現象をば本質的にはギディングスの所謂主觀的に卽ちその社會的現象を現出する諸個人の心意或ひは意識に基いて把捉することが、社會學の中心的部門卽ち純正社會學となるわけである。輓近の社會學が心理學と密接な關係に於て立つに至つたのは、このことによる。[2] 私たちは、多くの社會學者が今日なほ社會學と心理學との差異を力說することに過度に專心して居ることを、不思議に思ふ。現代の心理學者は、心理學の次第に增加する生理學との接近をば決して過敏に拒否しては居ないのである。

1　Giddings, op. cit., p. 10. フォン・ウイーゼは、社會學は社會的過程卽ち人間の行動の學であつて人間の中に於ける意識過程の

學ではない、とし、その課題は社會的諸過程を(a)概念的に他から區別し且つ記述し(b)全體系の中に配列し(c)分析し(d)測定し(e)比較することである、とするが、その分析は社會的諸過程をば(a)客觀的自然的事象と見做して並びに(b)主觀的心意的現象と見做して行はるべきであつて第一の場合に於いては社會學は主として生物學と關聯し第二の場合に於いては社會學は主として心理學と關聯する、と考へて居る(von Wiese, Allgemeine Soziologie, Teil I, S.19—21.)。

2 最近のアメリカに於ける社會學は、心理學が意識の學から動作の學に推移しようとして居るのに伴つて、その重點を社會的現象の主觀的解釋から客觀的解釋に逆戻りさせつつあるとも考へられる。この限りに於いて、動作心理學に基く社會學は、私たちが求める社會學から遠かるのである。

併し、社會的現象の主觀的解釋は、必ずしも、自然科學的實驗心理學でなければならぬ筈はない。ここに、マックス・ウェーバーの Verstehende Soziologie の從來の心理學的社會學に對して占める地位が、理解せられるのである。蓋し、ジンメルによつて始めて明白に說かれた社會的現象の本質を心意的相互作用と見る見解は、その心意的相互作用が自然的過程と見做されて、今や、意識的無意識的に、自然科學として社會學を樹立しようとする社會學者の根本的思想となつて居るのであるが、この心意的相互作用の中で意味を有するもの或ひは價値に結びつけられるものを特に重視しそれが意味を有するが故に或ひは價値に結びつけられるが故に取る種々なる樣相を注視して行はれる考察が一の體系に組織せられるところに、恐らくは、文化科學としての社會學が成立するであらう、と思はれるからである。

然るに、フィーアカントは、その主著の副題にHauptprobleme der philosophischen Soziologie と掲げながら何が故に哲學的なるかに就いては一言をも費さず、なほ、その社會學體系の內容は甚しく哲學的でない。彼の現象學的方法と稱するものは、心理學的方法と何れの點に於いて異るかが不明である、少くとも、ワルターに於ける如くには明白でない。[1] 現象學者の社會的現象に關する研究が人生の理解に對して將來の豐かな貢獻を約束して居るものであることは、クラカウアーやワルターの研究によつても、既に察知せられる。併し、社會の現象學的理解或ひは哲學的理解の外に社會の科學的理解が可能であることは、云ふまでもなからう。而して、私たちは、學の成立及び發達の歷史から考へて、社會學と云ふ名稱は科學としての社會の理解に對して保存せらるべきであつて、社會的實在の最後の意味或ひは本質を究明する社會本體學（オントロギー）及び此本質によつて必然的に示されるところの純粹意識に於けるかの實在の所與性・現象及び認識の樣態を研究する社會現象學（フェノメノロギー）は寧ろ哲學の範圍に屬すべきである、と考へたいのである。

1　なほ、フィーアカントは、ヴルターが指示して居る innere Konstitution, die sich in der immanenten und der inneren noetischen Reflexion oder in der Quellpunktanalyse vollzieht ゥ äussere Konstitution, die auf der unmittelbaren oder doch fundierenden Gegebenheit wahrgenommener, phantasierter usw. hyletischer Empfindungsdaten sich aufbaut ゥの區別、更に、社會的ゲマインシ

ヤフトの『外部的』構成、即ち、局外者從つて一の社會的ゲマインシャフトが封鎖せられた全體としてそれに對立するところの意識主體に對してのその構成と、その『內部的』構成、即ち、成員從つて自身が他の主體と共に一の社會的ゲマインシャフトへ且つ一の社會的ゲマインシャフトの中に於いて結合せられて居ることを見出し自身がこのゲマインシャフトの一員であると感ずる意識主體に對してのその構成との區別（Walther, op. cit., S. 16f.）を意識して居ないために、彼の社會體驗の反省・分析・記述は、頗る混雜して居る。

この他に、フィーアカントの社會學概念の論述に對しては、幾多の異論があり得るであらうが、それらは、この小論の目的とするところから見れば當面の問題ではないから、ここには觸れないで置く。彼の社會學は、先に一言したやうに、多くの社會學者に於けると同じく、社會の學である。而して、彼は、社會の本質をばジンメルの用語を借りて相互作用或ひは關係であるとするが故に、彼の社會學は、相互作用或ひは關係の學であるが、彼の相互作用或ひは關係は、特殊な意味を附與せられて居るを以つて、右に考察した彼の社會學概念を一層明白に理解するためには、彼の社會概念を闡明しなければならない。彼は、右に要約した緒論の中にもこれを略述して居るが、第一章にこれを詳述して居る。私たちは、次に、この彼の社會概念を要約し且つそれを考察することによつて、彼の社會學概念に存する諸問題をば一層徹底的に看破したいと思ふ。（未完）